

ジャイナ教空衣派における 「タントラ的な美徳の瞑想」〈2〉 —「言葉に関わる瞑想 (padasthadhyāna)」 について—

是 松 宏 明

はじめに

本稿は『東洋学研究』第57号の拙稿に引き続いて、Bālacandra Siddhānta Śāstrī, *Jñānārṇava*, Jīvarāja Jaina Granthamālā, Hindī Vibhāga 30, 1977 を底本として、シュバチャンドラ (Śubhacandra) によって著されたヨーガ文献『ジュニャーナールナヴァ (*Jñānārṇava*)』(以下、JA) の第35章「言葉に関わる瞑想 (padasthadhyāna)」における瞑想法について論じる。

padāny ālambya puṇyāni yogibhir yad vidhīyate /

tat padasthaṃ matam dhyānam vicitrānyapāragaiḥ // JA 35.1

福德を備えた言葉に依拠して、多様な観点に精通したヨーガ行者たちは「言葉に関わる瞑想 (padastha dhyāna)」について考える。

JA 第 35 章では、男性名詞ではマントラ (mantra)、女性名詞では明呪 (vidyā) と呼ばれる様々な聖句を pada として呼んでいる。

前拙稿で明らかにしたように JA では、

- ① 「物質的な対象に関わる瞑想 (piṇḍastha-dhyāna)」(JA 第 34 章)
- ② 「言葉に関わる瞑想」(JA 第 35 章)
- ③ 「形象に関わる瞑想 (rūpasthadhyāna)」(JA 第 36 章)
- ④ 「形象を超えたものの瞑想 (rūpātītdhyāna)」(JA 第 37 章)

と呼ばれる、タントリズムの影響を受けた4種類の瞑想方法が説かれる。JA 第 34 章の「物質的な対象に関わる瞑想」については前拙稿で論じた¹。

「言葉に関わる瞑想」の章は「タントラ的な美徳の瞑想」に関する他の章と比べて、そ

の内容の半分以上が断片的なマントラ・明呪の説明とそれを唱えることによって得られる果報に関する話題となっており、ジャイナ教の瞑想に関する論文では簡略的な内容紹介に留まることが多い。

しかし JA 第 35 章「言葉に関わる瞑想」に説かれる、幾つかのマントラ・明呪を使った瞑想法は単なる詠唱に留まらず、鮮やかな情景描写を伴う観想法を含むものが数点見られる。これらの観想法は JA の著者の思想性と密接に関わるものであるため、本論でも中心的に取り上げて考察の対象とする。

1. ジャイナ教徒の帰依の対象とマントラ

ジャイナ教で、マントラと呼ばれるものの中で最も人気があるものは「五敬礼」(AMg. pañcanamokkāra ; Skt. pañcanamaskāra) がある。現代では namokāra-mantra や navakāra-mantra、namaskāra-mantra など様々な呼ばれ方をしているが、基本形は空衣・白衣の両派ともに共通した内容である²。

ṇamo arahantāṇaṃ /

ṇamo siddhāṇaṃ /

ṇamo āyariyāṇaṃ /

ṇamo uvajjhyāyāṇaṃ /

ṇamo loe savva-sāhūṇaṃ /

[eso paṃca ṇamokkāro savva-pāvappaṇāsaṇo /

maṅgalāṇaṃ ca savvesiṃ paḍhamāṇaṃ havai maṅgalaṃ //]

阿羅漢方に礼拝する。解脱者方に礼拝する³。阿闍梨方に礼拝する⁴。和尚方に礼拝する。世界における全ての出家者方に礼拝する。[この五敬礼はあらゆる罪過を消滅するものであり、あらゆる吉祥の中で最上の吉祥である]。

「五敬礼」で説かれる阿羅漢・解脱者・阿闍梨・和尚・出家者は、仏教徒にとっての仏法僧の三宝のようにジャイナ教徒の帰依の対象であり、ジャイナ教関連の宗教書の最初の頁に記され、儀礼の最初に唱えられることが多い。

1 [是松：2020：65-67] を参照。

2 以下のマントラの原文は、[Jaini：1979：162-163] から引用した。

3 ジャイナ教において、siddha とは一切知者が身口意の全ての業を消滅して、世界の頂きを上昇した身体を持たない純粋な個我を指す。本論では、密教やヒンドゥー・タントラにおける成就者と区別するために「解脱者」と訳す。

4 ジャイナ教において、ācārya は一つの僧団 (gaṇa) における一人の長を指す。

1-1. JA における「五敬礼」

JA 35 章「言葉に関わる瞑想」では、上記の礼拝対象に関するものが多くを占める。JA でも「五敬礼」のマントラが以下のように説かれている。

gurupañcanamaskāralakṣaṇām mantram ūrjitam /

vicintaya jagajjantupavitrīkaraṇakṣamam // JA 35.40

sphurad vimalacandrābhe dalāṣṭakavibhūṣite /

kañje tatkarṇikāsīnam mantram saptākṣaram smaret // JA 35.41

digdaleṣu tato'nyesu vidikpatreṣv anukramāt /

siddhādikacatuṣkaṃ ca dṛṣṭibodhādikam tathā // JA 35.42

om ṇamo arahamtāṇam / ṇamo siddhāṇam / ṇamo āriyāṇam /

ṇamo uvajjhāyāṇam / ṇamo loe savvasāhūṇam / aparājitamantro'yam /

darśanaññānacāritatapāmsi /

五師への礼拝を特徴としており、偉大であり、世界中の生類たちを浄めることができるマントラを想起せよ。輝く汚れのない月の光を持ち、8 弁で飾られた蓮華の上に、その花托に座している 7 文字のマントラ (ṇamo arahamtāṇam) を想起せよ。そして、四方の花弁と他の四隅には順番に、[四方の花弁には] 解脱者を始めとする四者、[四隅には同様に [正しい] 信仰 (dṛṣṭi) や覚知 (bodha)⁵ がある。

「オーム、阿羅漢方に礼拝する。解脱者方に礼拝する。阿闍梨方に礼拝する。和尚方に礼拝する。世界における全ての出家者方に礼拝する (om ṇamo arahamtāṇam, ṇamo siddhāṇam, ṇamo āriyāṇam, ṇamo uvajjhāyāṇam, ṇamo loe savvasāhūṇam)」。これが比類なきマントラである。[そして] 信仰、知識、行為、苦行である。

JA 35 章に説かれる多くのマントラ・明呪はこの「五敬礼」の中の阿羅漢や解脱者に対する敬礼の言葉で構成されている。ジャイナ教に対する信仰表明ともいえるこのマントラの功德として、シュバチャンドラは解脱が得られると説く。

śriyam ātyantikīm prāptā yogino ye'tra kecana /

amum eva mahāmantram te samārādhya kevalam // JA 35.43

prabhāvam asya niḥśeṣam yoginām apy agocaram /

anabhiñño jano brūte yaḥ sa manye'nilārditaḥ // JA 35.44

anenaiva viśudhyanti jantavaḥ pāpapañkitāḥ /

5 これはスイツダチャクラ (siddhacakra) と呼ばれる、ジャイナ教のヤントラ (yantra) と同様の配置となっている。中央と四方には「五敬礼」の対象である阿羅漢・解脱者・阿闍梨・和尚・出家者が配置され、四隅にはジャイナ教で三宝と呼ばれる信仰 (darśana)・知識 (jñāna)・実践 (caraṇa) と、苦行 (tapas) の概念が配置される。シュバチャンドラは信仰と知識のことをしばしば dṛṣṭi, bodha と呼称する。

anenaiva vimucyante bhavakleśān manīṣiṇaḥ // JA 35.45

asāv eva jagaty asmin bhavyavyasanabāndhavaḥ /

amuṃ vihāya sattvānām nānyaḥ kaścit kṛpāparaḥ // JA 35.46

etad vyasanapātāle bhramat saṃsārasāgare /

anenaiva jagatsarvam uddhṛtya vidhṛtaṃ śive // JA 35.47

この偉大なマントラを崇めるだけで、ヨーガ行者の誰もがこの中で終わりのない吉祥を獲得する。ヨーガ行者たちですら完全には理解できないそれ（マントラ）の効力を知らずして語る者はヴァータに関する病に苦しむ者（anilārdita）であると見做される。これによってこそ、罪過という泥にまみれた生き物たちは清められる。これによってこそ、賢者たちは生存という苦しみから解脱する。それはこの世界の解脱可能者（bhavya）⁶の災いの中の親類である。それ以外の他の何ものであっても生類たちに憐れみを持つものではない。災いというパーターラ（pātāla）である輪廻の大海を彷徨っており、かの世界の全ての者はそれ（マントラ）によって上昇し、解脱に至る。

ジャイナ教徒にとってジナとジナの教えこそが輪廻からの解脱の唯一の手段であることからすれば、シュバチャンドラがこのマントラの果報を解脱と考えていることは必然的である。そして、JAの著者はこのマントラを拝することで、罪業を犯し、多くの生き物を殺した動物ですら、天界に赴くことができると以下のように説く。

kṛtvā pāpasahasrāṇi hatvā jantuśatāni ca /

amuṃ mantraṃ samārādhya tiryāṅcō'pi divaṃ gatāḥ // JA 35.48

幾千もの罪を為し、何百もの生類を殺した動物（tiryāṅca）⁷すらもこのマントラを崇めることで天界に赴く。

1-2. マントラ念誦による断食の功德の獲得

JAにおける「五敬礼」の解説でより注目すべき点はシュバチャンドラがこのマントラによる利益として、解脱や天界への再生などの出世間的なものばかりではなく、一日断食した果報までもが得られると説いていることである。

śatam aṣṭottataraṃ yasya triśuddhyā cintayan munih /

6 bhavya と abhavya とは、ジャイナ教に置いて解脱可能者・不可能者を意味する。一切知者でない輪廻に再生する通常の生類は解脱の可能性を内在しているのと同時に煩惱や業、ジャイナ教への信仰がないことによる解脱不可能性もあることによって解脱せずに輪廻に留まり続ける。

7 仏教で畜生を指す tiryāṅca という語に関してジャイナ教の宇宙観では植物も輪廻の主体として tiryāṅca に含めるため、通常の場合「動植物」と訳す方が適切である。しかし、この文脈では動物だけを指していると考えた方が妥当である。

bhūñjāno'pi caturthasya prāpnoty avikalāṃ // JA 35.49

[身口意の]三浄化をもって、[前述のマントラを]108回念じる牟尼は、食事を取っていでですら一日間の断食 (caturtha)⁸を完全に獲得する。

シュバチャンドラは「五敬礼」を108回念誦することで、実際には食事を取っているものですら一日分の断食の功德が得られると説明している。また、この「五敬礼」に類似した以下の様々なマントラを特定の回数唱えることで一日断食した分と同じ功德が得られるという記述が続く。

smara mantrapadodbhūtāṃ mahāvidyāṃ jagannatāṃ /

gurupañcakanāmotthaṣoḍaśākṣararājītāṃ // JA 35. 50

arhatsiddhācāryopādhyāsarvasādhubhyo namaḥ / ṣoḍaśākṣarī vidyā /

asyāḥ śatadvayaṃ dhyānī japann ekāgramānaṣaḥ /

anicchann apy avāpnoti caturthatapasāḥ phalam // JA 35.51

vidyāṃ ṣaḍvarṇasambhūtāṃ ajayyāṃ puṇyāśālinīm /

japan prāḡ uktam abhyeti phalaṃ dhyānī śatatrayaṃ // JA 35.52 // arahamṭtasiddha

caturvarṇamayīm vidyāṃ caturvargaphalapradām /

prāpnuyād astatandro'sau dhyāyaṃś cāturthikaṃ phalam // JA 35.53 // arahamṭta

[varṇayugmaṃ śrutaskandhasārabhūtāṃ śivapradam /

dhyāyej janmodbhavāśeṣakleśavidhvamsanakṣamam // JA 53.1 // siddhaḥ //]

avarṇasya sahsrārdham japann ānandasambhṛtaḥ /

prāpnoty ekopavāsasya nirjarāṃ nirjitāśayaḥ // JA 35.54 // aḥ //

etad dhi kathitaṃ śāstre rucimātraprasādhakam /

kintv amīṣāṃ phalaṃ samyak svargamokṣaikalakṣaṇam // JA 35.55 //

マントラの文字から生じ、世界から崇められ、五師の名前から生じた16文字の無比なる偉大な明呪を念想せよ。「阿羅漢・解脱者・阿闍梨・和尚・一切の出家者に礼拝 (arhatsiddhācāryopādhyāsarvasādhubhyo namaḥ)」。16字明呪である。

それを200回集中して唱える瞑想者は望んでおらずとも一日分の断食 (caturthatapas)⁹の結果を得る。

福德に満ちた無敵の、6文字から生じた明呪を300回唱える瞑想者は前述した結果を得る。

8 ジャイナ教における断食の数え方は序数で表される。一日二回の食事をベースとして、食事を何回分か抜いて、最終的に断食を解いて食事をする時までを序数と呼ぶ。第四の断食ということは、×を抜いた食事、○を断食解きの食事として、×××○、つまり一日分の断食を指す。JA 35.49以降でも、4 (catur) に関する語が一日分の断食として使われている。

9 注釈の ekopavāsasya という説明に沿った。

「阿羅漢解脱者 (arahaṃtasiddha)」。

4文字からできた、一日分の断食 (caturvarga) の結果をもたらす明呪を懈怠なく瞑想する彼は一日分の断食 (cāturthika) の結果を得ることが出来る。「阿羅漢 (arahaṃta)」。

聖典群の精髓から生じ、解脱をもたらし、誕生を生じる全ての煩惱を滅することができる2文字を瞑想すべし。「解脱者 (siddha)」である。

歓喜に満ちて、心を制して a 字を 500 回唱える者は一日分の断食の業の消滅 (nirjarā) を得る。a [字] である。論書にこれ (マントラ) は輝きに満ちたものをもたらすものとして説かれている。しかしながら、それらの本当の結果は天界と解脱に関する特徴を持つ。

以上のように、マントラが長ければ長いものほど念誦数が少なく、短ければ短いものほど念誦数が多くなる。最も短いものだと、一音節の a 字のみのマントラとなる。

このように阿羅漢や解脱者への敬礼をマントラとして、瞑想の対象とする考え方は JA よりも 2 世紀前に、空衣派ジナセーナ (Jinasena)¹⁰ によって著された文学作品『アーディ・プラーナ (Ādipurāṇa)』(以下、AP) にも見られる。AP はマハーヴィーラの高弟ガウタマ (Gautama) が篤信のジャイナ教徒シュレーニカ王と他の出家者を聴衆として、第一祖リシャバ (Rṣabha) の生涯を説く内容となっている。しかし AP の第 21 章は、一旦リシャバの説話を中断し、シュレーニカと他の出家者たちがガウタマに瞑想について様々な質問を投げかけて、ガウタマがそれに答える形式の挿入部となっている。この中に瞑想の種子 (bīja) は何であるか、という質問がある。ここでの種子はマントラとほぼ同義のものとして扱われており、ガウタマはその質問に以下のように答えている¹¹。

phalaṃ yathoktaṃ bījāni vakṣyamāṇāny anukramāt /

pratyāhāras tu tasyopasaṃhṛtau cittanirvṛtīḥ // AP 21.230

akārādihakārāntarephamadyāntabindukam /

dhyāyan param idaṃ bījaṃ muktyarthī nāvasīdati // AP 21.231

ṣaḍakṣarātmakaṃ bījam ivārhadbhyo namo'stv iti /

dhyātvā mumukṣur ārhantyaṃ anantaṅgaṃ ṛcchati // AP 21.232

namaḥ siddhebhya ity etad daśārdhastavanākṣaram /

10 シュバチャンドラが祖師たちや重要な文献を残した著名な歴代阿闍梨を称える JA の第一章「須弥壇 (pīthikā)」の中にも Jinasena の名前が見られる。

jayanti jinasenasya vācas traividyaṃ vāditāḥ /

yogibhir yāḥ samāsādyā skhalitaṃ nātmaniścaye // JA 1.16

三明呪 (校訂者のヒンディー語訳によると、聖典・論理・文法) を知る者たちによって礼拝される、ジナセーナの御言葉はヨーガ行者者たちによって敬礼されて、個我に対する決定から逸脱することなく栄光に輝く。

11 本論中の AP の和訳の底本としたのは Pannālāl Jain, *Ādipurāṇa*, Bhāratiya Jñānapīṭha, 2004 (vol.1) and 2011 (vol. 2) である。

japañ japyeṣu bhavyātmā sveṣṭān kāmān avāpsyati // AP 21.233

aṣṭākṣaram param bījaṃ namo'rhatparameṣṭhine /

iṭidam anusamsmṛtya punar duḥkhaṃ na paśyati // AP 21.234

yat ṣoḍaśākṣaram bījaṃ sarvabījapadānvitam /

tattvavit tad anudhyāyan dhruvam eṣa mumukṣate // AP 21.235

pañcabrahmamayair mantraiḥ sakalīkrtyaniṣkalam /

param tattvam anudhyāyan yogī syād brahmatattvavit // AP 21.236

yoginaḥ paramānando yo'sya syāc cittanirvṛteḥ /

sa evaiśvaryaparyanto yogajāḥ kim utarddhayaḥ // AP 21.237

aṇimādiguṇair yuktam aiśvaryaṃ paramodayam /

bhuktvahaiva punar muktṛvā munir nirvāti yogavit // AP 21.238

bījāny etāny ajānāno nāmamātreṇa mantravit /

mithyābhimānopahṛto bamdhyate karmabandhanaiḥ // AP 21.239

結果は〔既に〕説いた通りである。種子は次に説かれる。それ（種子）を捉えて、心を止めることが制感である。a 字で始まり、ha 字で終わり、r 字が間にあり、最後にピンドゥを持つこの最高の種子（arhaṃ 字）を瞑想する解脱を求める者は苦しむことがない。六音節で構成された種字である「阿羅漢方に礼拝（arahadbhyo namo'stu）」と瞑想して、解脱を希求する者は敬意に値する無限の美德を獲得する。「解脱者方に礼拝（namaḥ siddhebhyaḥ）」という五音節の讃嘆の念誦を唱えることで、解脱可能者は己が望む願望を獲得するだろう。「阿羅漢という最高者に礼拝（namo'rhatparameṣṭhine）」というこの八音節の最高の種子を憶念すれば、再び苦しみを見ることはない。全ての種子を備えた十六音節の種子（arhatsiddhācāryopādhyāyasarvasādhubhyo namaḥ）¹²を瞑想する者はかの真実を知り、確実に解脱を求める。5種の絶対者で構成されたマントラによって、形を持つものとされる形を持たない最高の真実¹³を瞑想するヨーガ行者は絶対者の真実を知る者となる。心を制止したかのヨーガ行者には最高の歓喜があり、それこそが自在力の極致である。ヨーガによって生じる神通力が何になろうか。ヨーガを知る牟尼はアニマン（aṇiman）¹⁴などの特質と結び付いた自在力という最高の結果をこの世で享受し、そして〔それを〕捨て去り、涅槃に入る。これらの種子を知らない者たちは名前だけのマントラ知者に過ぎない。慢心（mithyābhimāna）に捉われた者は業という束縛に縛られる。

12 AP 21. 235-236 の偈頌では十六音節の種子の具体的な内容は説かれていないが、底本のヒンディー語訳では、JA 35.50 でも説かれる arhatsiddhācāryopādhyāyasarvasādhubhyo namaḥ のマントラを指すものとして補って訳されており、それに沿った。

13 身体を持つ阿羅漢と解脱して身体を持たない解脱者のこと。

14 原子並みに微細になる神通力。8種類の自在力（aiśvarya）と呼ばれる神通力の一つ。

APでも、阿羅漢や解脱者などの「五敬礼」の礼拝対象に関するマントラの念誦が説かれている。

しかし、APではマントラの念誦回数規定に関する言及はなく、その念誦によって得られる利益も観念的な内容となっている。それに対して、JAではそれぞれのマントラの特定の回数の念誦によって、ジャイナ教の代表的な苦行の一つである断食をしたのと同じ果報が得られる、という即物的な利益が説かれている点が対照的である。

2. 「言葉に関わる瞑想」における連続した手順を持つ諸観想法

JA35章は様々なマントラとその功德の説明で1~2、3偈で単発的に説明が終わる箇所が多いが一連の観想の流れを持つ修行方法も説かれている。本章ではその4点の瞑想法を取り上げて論じる。

2-1. 字母 (varṇamātrkā) の観想

JA35章で最初に説かれる観想法は字母の観想である。ここでは母音字から子音字までの49のサンスクリットの字母を身体内部の蓮華に布置する。

dhyāyed anādisiddhāntaprasiddhām varṇamātrkāṁ /
 niḥśeṣaśabdavinīyāsajanmabhūmiṁ jagannatām // JA 35.2
 dviguṇāṣṭadalāmbhoje nābhimaṇḍalavartini /
 bhramantīm cintayed dhyānī pratipatraṁ svarāvalīm // JA 35.3
 caturviṁśatipatrādhyam hṛdi kañjam sakarṇikam /
 tatra varṇān imān dhyāyet saṁyamī pañcaviṁśatim // JA 35.4
 tato vadanarājīve patrāṣṭakavibhūṣite /
 paraṁ varṇāṣṭakam dhyāyet saṁcarantaṁ pradakṣiṇam // JA 35.5
 ity ajasraṁ smaran yogī prasiddhām varṇamātrkāṁ /

śrutajñānāmbudheḥ pāraṁ prayāti vigatabhramah // JA 35.6

よく知られた無始なる定説であり、あらゆる字音の配置を生み出す大地であり、世界から崇められた字母を瞑想せよ。臍輪に位置する16弁の蓮華の上に、瞑想者は各々の蓮弁の上で回転している母音字列 (a, ā, i, ī, u, ū, ṛ, ṛī, ḷ, ḷī, e, ai, o, au, am, aḥ) を念想すべし。24弁の花弁に満ちており¹⁵、花托を備えた心臓に蓮華がある。そこに自制を保つ者はこれらの25文字 (ka, kha, ga, gha, ṇa, ca, cha, ja, jha, ṇa, ṭa, ṭha, ḍa, dha, ṇa, ta, tha, da, dha, na, pa, pha,

15 心臓の蓮華は24弁となっているので25文字の子音字を布置するには花弁が1弁足りなくなる。この箇所の異読あるいはヒンディー訳や注釈による詳細な説明はない。どれか1文字を花托の上に布置することを想定していた可能性が考えられる。Uditaprabhāによるジャイナ教の瞑想研究の文献中のpp36-37の間に挿入されたイラストではma字が花托の位置に描かれている。[Uditaprabhā: 2007: 36-37]。

ba, bha, ma) を念想せよ。続いて、8弁で飾られた口の青蓮に右回りに動き回りつつある次の8文字 (ya, ra, la, va, śa śa, sa, ha) を瞑想せよ。以上の通りによく知られた字母を常に憶念している誤謬を離れたヨーガ行者は聖典知という海の向こう岸を渡る。

言語を形成する基本的な要素である母音字と子音字を身体内に布置して観想することによって、ジャイナ教の五知の一種であり、言語媒体に関わる聖典知に精通することができるようになるという。

また字母の観想によって肺病 (kṣaya) や食欲不足 (arocaka) などの様々な病気などを克服する果報も得られるという。

uktaṃ ca,

jāpāñjayet kṣayam arocakam agnimāndyaṃ kuṣṭhodarātmakamaṇaḥ śvasanādrogān¹⁶ /

prāpnoti cāpratimavāñmahatīm mahadbhyaḥ pūjāṃ paratra ca gatīm puruṣottamāptām // JA 35.6.2

また言われている。念誦によって、肺病や食欲不足、消化不良 (agnimāndya)、ハンセン病 (kuṣṭha)、腹部膨張 (udara) といった性質の精神や呼吸などの病 (maṇaḥśvasanādiroga)¹⁷ に打ち勝つことが出来る。そして偉大なものよりも偉大な言葉と敬意、そして将来最高の人が得た帰趨を獲得する。

2-2. 「マントラの王者と打ち鳴らされない音 (anāhata)¹⁸」

JA 35 章の 2 番目に説かれる瞑想方法は「マントラの王者と打ち鳴らされない音」と呼ばれる。ここでは先ずマントラの王者と呼ばれる 1 音節のマントラである rhraṃ 字を観想する。

atha mantrapadādhiśaṃ sarvatattvaikanāyakam /

ādimadhyāntabhedena svaravyaṅjanasaṃbhavam // JA 35.7

ūrdhvādhorephasamruddhaṃ sakalaṃ bindulāñchitam /

anāhatayutaṃ tattvaṃ mantrarājaṃ pracakṣate // JA 35.8

さて、マントラという聖句の主であり、一切の原理の唯一の支配者であり、最初と中間と終わりの差異によって一切の母音と子音を発生するものであり、上方と下方が r 字で遮られており、[チャンドラビンドウの] 三日月を伴っており (sakala)、[チャンドラビンドウの] 滴で飾られており、打ち鳴らさない音 [である ha 字] で結ばれた真実在をマントラの王者 (rhraṃ) と呼ぶ。上方と下方が r 字で遮られており、[チャンドラビンドウの] 三

16 注釈では maṇaḥ となっているが底本の原文だと maṇaḥ に当たる箇所が sana となっており、誤植の可能性が高いため訂正した。

17 注釈では「ヴァータ (vāta) などの病気」と解釈している。

18 引田弘道によると「喉の筋肉を打ち鳴らさない音 (anāhata)」[引田：1997：446]。

日月を伴っており (sakala)、[チャンドラビンドウの] 滴で飾られており、打ち鳴らさない音 (anāhata) [である ha 字] で結ばれた真実在をマントラの王者 (rhraṁ) と呼ぶ。

nayantam paramasthānam yojayantam śivaśriyam /

iti mantrādhipam dhīra kumbhakena vicintayet // JA 35.19 // 'rham /

ananyaśaraṇaḥ sākṣāt tat saṁlīnaikamānaśaḥ /

tathā smaraty asau dhyānī yathā svapne 'pi na skhalet // JA 35.20

iti matvā sthirībhūtam sarvāvasthāsu sarvathā /

nāsāgre niścalaṁ dhatte yadi vā bhrūlatāntare // JA 35.21

最高の境地に導いていて、吉祥なる幸運 (śivaśrī)¹⁹ に結び付いている、と止息 (kumbhaka) をしながらマントラの王者を念想せよ、賢者よ。他に庇護を求めず、現前にただ一つの心をそれと結合させている、このような瞑想者は夢にも過ちを犯さないように瞑想する、と堅固になったと考えて、あらゆる状況において、いかなる時も、鼻先に、あるいは眉間に [マントラの王者を] 不動にしておく。

マントラの王者は鼻先あるいは眉間に布置されて、調気法 (prāṇāyāma) の一種である止息を伴って瞑想を行う。続いて、マントラの王者の チャンドラビンドウや子音の r 字などの部位が消滅し、ha 字だけが残る観想が指示される。

sarvāvayavasampūrṇam tato 'vayavavicyutam /

krameṇa cintayed dhyānī varṇamātram śaśiprabham // JA 35.23

binduhīnam kalāhīnam rephadvitayavarjitam /

anakṣaratvam āpannam anuccāryam ca cintayet // JA 35.24 // haḥ /

candralekhāsamaṁ sūkṣmaṁ sphurantaṁ bhānubhāsvaram /

anāhatābhidhaṁ devaṁ divyarūpaṁ vicintayet // JA 35.25 // ha /

asmin sthīrīkṛtābhyāsāḥ santaḥ śāntiṁ samāśritāḥ /

anena divyapotena tūrtvā janmograsāgaram // JA 35.26

一切の [文字の] 部位が完全である。それから、[文字の] 部位が分離する。瞑想者は順番に月光のような文字のみを念想せよ。[チャンドラビンドウの] 滴がなくなった。[チャンドラビンドウの] 三日月がなくなった。2つの r 字が取り除かれて、非文字性を獲得しており、そして発音されないものである、と念想すべし。月の線のように繊細であり、輝いており、太陽 [の如く] 輝かしい打ち鳴らさない音 [である ha 字] という名前の神々

19 注釈によると解脱 (mokṣa) を指す。

しい姿の神を念想すべし。この中で修練を堅固に為し続けている者たちはこの聖なる船によって誕生という荒々しい海を越えて、寂靜に赴く。

rhram̐字から二つの r 字とチャンドラビンドゥが消えて、ただ ha 字だけが残る。修行者は ha 字を月の線のように、つまり三日月のように繊細で、太陽のように輝かしいものとして観想する。

最終的に修行者は ha 字を髪の毛の先程小さく収縮していき、最後に ha 字すらも消滅し、ヨーガ行者は神通力や牟尼が望む成就を得るという。

tad eva ca punaḥ sūkṣmaṃ kramād bālāgrasam̐nibham /

dhyāyed ekāgratām̐ prāpya kartuṃ cetaḥ suniścalam // JA 35.27

tato vīgalitāśeṣaviṣayīkṛtamānasaḥ /

adhyakṣam̐ īkṣate sākṣāj jagaj jyotirmayaṃ kṣaṇe // JA 35.28

sidhyanti siddhayaḥ sarvā aṇimādyā na samśayaḥ /

sevām̐ kurvantu daityādyā ājñaiśvaryam̐ ca jāyate // JA 35.29

tataḥ pracyāvya lakṣyebhya alakṣye niścalam̐ manah /

dadhato 'sya sphuraty antarjyotir atyakṣam̐ akṣayam // JA 35.30

iti lakṣyānusāreṇa lakṣyābhāvaḥ prakīrtitaḥ /

tasmin sthitasya manye 'ham̐ muneh̐ siddhiṃ samīhitam // JA 35.31

etat tattvam̐ śivākhyam̐ vā samālam̐bya manīṣiṇaḥ /

uttīrṇā janmakāntāram̐ anantakleśasam̐kulam // JA 35.32 mantrarājam̐ anāhatam̐ [ca]

まさにそれから意識を不動にするために一点集中を獲得して、それを次第に髪の毛の先のように繊細に念想すべし。その後、思考器官 (manas) から対象を完全に消し去った人は、一瞬で輝きに満ちている世界を現前に見る。アニマンなどの全ての成就を成就することは間違いない。ダイティヤ等が世話を為す。教令も自在力も勝ち取る。その後、対象から無対象に不動の精神を動かして、かの保持している者の知覚を超えた不滅の内面の光が輝く。という対象に従って、対象の不在として説かれた。そこに牟尼が望む成就が存在すると私は認める。この真実があるいは吉祥と呼ばれるものに依拠して、賢者達は終わりのない煩惱に満ちた誕生という荒野を通り抜けた。[以上が] マントラの王者と打ち鳴らされない音 [である ha 字] である。

打ち鳴らされない音の観想によって得られる成就は段々と縮小していく ha 字が消滅した時に修行者が一瞬で世界が輝きに満ちた様子を見るという。また神通力の獲得やダイティヤ等からの奉仕、などの付属的な果報も説かれている。

マントラの王者と打ち鳴らされない音の観想のように、長期的な修行を想定し、神秘体験の記述がより顕著なものは続いて論じる hrīm 字の観想である。

2-3. hrīm 字の観想

smarendumañḍalākāraṃ puṇḍarīkaṃ mukhodare /

dalāṣṭakasamāsīnavargāṣṭakavīrajitam // JA 35.65

oṃ ṇamo arahantānam iti varṇāpi kramāt /

ekaśaḥ pratipatraṃ tu tasmīn eva niveśayet // JA 35.66

svaṇḡagaurīm svarodbhūtām keśarālīm tataḥ smaret /

karṇikām ca sudhāsyandabinduvrajavibhūṣitām // JA 35.67

prodyat saṃpūrṇacandrābhaṃ candrabimbāc chanaiḥ śanaiḥ /

samāgacchat sudhābījāṃ māyāvāraṇaṃ tu cintayet // JA 35.68

visphurantaṃ atisphītaṃ prabhāmaṇḍalamadhyagam /

saṃcarantaṃ mukhāmbhoje tiṣṭhantaṃ karṇikopari // JA 35.69 // hrīm /

口の中に、月輪の形をしており、八字音列 (vargāṣṭaka)²⁰ が乗った八弁の蓮華を念想せよ。まさにその各花卉の上に「オーム、阿羅漢方に礼拝 (oṃ ṇamo arahantānam)」という文字を順番の一つずつ置くべし。続いて、母音字から生じた黄金色の花糸の列と甘露の滴の集まりを垂らして輝く花托を念想すべし。満月の輝きを放ち、月輪からゆっくりと顕れる甘露の種子である hrīm 字 (māyāvāraṇa)²¹ を想起すべし。[hrīm 字は] 輝いており、大変広大であり、光輪の中央にあり、口の蓮華で動いており、花托の上に立っている。[以上が] hrīm 字である。

以上のように、hrīm 字の観想では、口の中に八弁蓮華を観想し、その各花卉に母音、喉音、口蓋音、反舌音、歯音、唇音、有声半母音、3つの歯擦音と1つの気音の八字音列が乗っている。そして、その各八花卉に oṃ, ṇa, mo, a, ra, haṃ, tā, ṇam という八文字を右回りの順に布置する。そして口の蓮華の中央には、母音字から生じた黄金色の花糸の列と甘露の滴の集まりを垂らして、満月のように輝く花托があり、その上に hrīm 字を観想する。

bhramantaṃ pratipatreṣu carantaṃ viyati kṣaṇe /

chedayantaṃ manodhvāntaṃ sravantaṃ amṛtāmbubhiḥ // JA 35.70

vrajantaṃ tālurandhreṇa sphurantaṃ bhrūlatāntare /

20 ヒンディー語訳によると、母音 (a, ā, i, ī, u, ū, ṛ, ṝ, ḷ, ḹ, e, ai, o, au, aṃ, aḥ), 喉音 (ka, kha, ga, gha, ṇa), 口蓋音 (ca, cha, ja, jha, ṇā), 反舌音 (ṭa, ṭha, ḍa, ḍha, ṇa), 歯音 (ta, tha, da, dha, na), 唇音 (pa, pha, ba, bha, ma), 有声半母音 (ya, ra, la, va), 3つの歯擦音と1つの気音 (śa, ṣa, sa, ha) の8字列である。

21 注釈によると、māyāvāraṇa とは hrīm 字。

jyotirmayam ivācintyaprabhāvaṃ bhāvayen munih // JA 35.71

各花卉の上を彷徨っており、一瞬で空に拡がり、精神の闇を断ち切り、甘露水を流しており、口蓋の穴を通して、眉間で星空のように輝き、不可思議な力を持つもの [hrīm 字] を牟尼は修習すべし。

hrīm 字は静止したものではなく、口の中や各花卉上を動き回り、ヨーガ行者の口蓋を通して眉間で星空のように輝く、という非常に動的なものとして観想されている。そしてこの観想法の功德は以下のように説かれている。

vākpathātītamāhātmyaṃ devadaityoragārcitam /

vidyārṇavamahāpotam viśvatattvapradīpakam // JA 35.72

amum eva mahāmantraṃ bhāvayann astasaṃśayaḥ /

avidyāvvyālasambhūtam viṣavegaṃ nirasyati // JA 35.73

iti dhyāyann asau dhyānī tat saṃfīnaikamānasah /

vānmanomalam utsrjya śrutāmbhodhiṃ vigāhate // JA 35.74

言葉でもって語ることを超えた偉大さを備えており、神々やダイティヤ、ナーガたちから拝されており、明呪という大海にとっての大きな船であり、全ての真実を明らかにするものであり、その偉大なマントラを疑うことなく修習する者は無明という蛇から生じる毒の作用を消滅する。以上のように、瞑想するかの瞑想者はそれと精神を一つにして没入し、言葉と精神の汚れを取り除き、聖典という大海で沐浴する。

JA 35.72-74 まででは、「無明という蛇から生じる毒の作用の消滅」と「聖典という大海での沐浴」と観念的な観想の結果が説かれている。しかしこれ以降の偈頌で、シュバチャンドラは hrīm 字の観想を長期的に続けることによって経験するある種の神秘体験を順序立てて説明する。

tato nirantarābhyāsān māsaiḥ ṣaḍbhiḥ sthirāśayaḥ /

mukharandhrād viniryāntīm dhūmavartim prapaśyati // JA 35.75

tataḥ saṃvatsaraṃ sāgraṃ tathavābyasyate yadi /

prapaśyati mahājvālām niḥsaranīm mukhodarāt // JA 35.76

tato'tijātasamvego nirvedālbrito vaśī /

dhyāyan paśyaty aviśrāntaṃ sarvajñamukhapañkajam // JA 35.77

athāpratihatānandaprīnitātmā jitaśramaḥ /

śrīmat sarvajñadevaṃ sa pratyakṣam iva vīkṣate // JA 35.78

sarvātīśayasampūrṇaṃ divyārūpopalakṣitam /

kalyāṇamahimopetaṃ sarvasattvābhayaḥpradam // JA 35.79

prabhāvalayamadhyasthaṃ bhavyarājīvaraṅjakam /

jñānalādharam dhīram devadevaṃ svayambhuvam // JA 35.80

tato vidhūtātandro'sau tasmin samjātaniścayaḥ /

bhavabhramam apākṛtya lokāgram adhirohati // JA 35.81

その後、6か月間絶え間なく修練することによって心を堅固にした者は、口という穴から出る煙の柱を見る。その後、もし1年以上同じ様に修練すれば、口という穴から出る大きな火を見る。解脱への欲求 (samvega) を強く生じており、世俗への厭離 (nirveda) を拠り所とし、休むことなく瞑想する力を持つ者は一切知者の口という蓮華を見る。さらに、遮られることなく歓喜を楽しみ、倦むことのない彼は聖なる一切知者様を目の前にいるかのように見る。全ての卓越性を備えており、神々しさを備えており、吉祥な偉大さを備えており、一切衆生に無畏をもたらし、威光という没入の中にあり、解脱可能者という蓮華を染めるものであり、知という遊戯を保持している賢者であり、神の中の神であり、自生者であり、その時、懈怠がなく、彼の者 (一切知者) に決定を生じた彼は生存という放浪を捨て去り、世界の頂点に上昇する。

以上の記述によれば、この観想を6か月間続ければ口から煙の柱を見て、1年以上継続すれば口から大きな火を見て、そして一切知者の口、さらには一切知者を目の前にいるかのように見て、最終的には世界の頂点に上昇、つまり解脱に至る。

観想によってジナの教えを説く一切知者の口や一切知者そのものを現前に見る、という考え方はジャイナ教の聖典観と関わるものだと考えられる。例えば、ジャイナ教における解脱に直接的に至る方法とされる純粹の瞑想はプールヴァ [聖典] (pūrva) を知る者が実践可能であるという²²。プールヴァとは伝承が途絶えた14種類の古代のジャイナ教聖典である。ジャイナ教の歴代開祖である24人のティールタンカラ (tīrthāṅkara) の中心的な弟子であるガナダラ (gaṇadhara) が最古の教説を纏めたものであると言われている。プールヴァ聖典は口伝で書かれたことがなく、徐々にその伝承が途絶えたという。伝説上、全ての聖典を知る最後の者は6代目の教団の長バドラバーフ (紀元前3世紀頃) であったと空衣派と白衣派の両派で認められている。これはつまりプールヴァの伝承が途絶えたバドラバーフ以降の時代では純粹の瞑想は実践不可能なものとなっていたということになる。

22 ājñāpāyavipākasamsthānavicayāya dharmyam / *Tattvārthasūtra* 9.36

śukle cānye pūrvavidhaḥ / *Tattvārthasūtra* 9.37

教令 (ājñā) [の考察]、損失 (apāya) [の考察]、[業の] 異熟 (vipāka) [の考察]、[世界の] 構造 (samsthāna) の考察に対して [憶念を継続すること (smṛtisamanvāhāra) が] 美德 [の瞑想] である。プールヴァ (pūrva) を知る者には最初の [の二種類の] 純粹 [の瞑想] もある。

また14 プールヴァと並んで、ジャイナ教にはアンガ (aṅga) と呼ばれる12 聖典群のカテゴリも伝えられているが、白衣派はこの内の11 アンガのみを伝承し、空衣派ではプールヴァとともにアンガの伝承も途絶えており、白衣派の編纂した11 アンガの権威も認めていない。

聖典の伝承が途絶え、一切知者となることが既に不可能になったという極めて悲観的な史観に応じるためか、プールヴァの伝承が途絶えていない地に生まれ変わって修行をすることで解脱するという説が後代の文献で説かれるようになる²³。hrīm 字の観想の結果として、一切知者の口やその姿を面前にする描写が説かれるのは以上のような背景が影響しているのではないかと考えられる。

以上のように、シュバチャンドラは聖典の伝承が実際には不可能になった状況に対して、マントラの観想や念誦の修行を通して、聖典の知識や一切知の結果を先取りして経験する、タントリズムの発想を取り入れているといえる。

2-4. om ṇamo arahamṭāṇaṃ と ṇamo arahamṭāṇaṃ の観想

またJAには「五敬礼」の最初に唱えられる ṇamo arahamṭāṇaṃ に om を加えたマントラの文字の念想を八日間継続して行う修法も説かれている。

digdalāṣṭakasampūrṇe rājīve supraṭiṣṭhitam /

smaraty ātmānam atyantaspurad grīsmārkabhāsvaram // JA 35.95

praṇavādy asya mantrasya pūrvādyeṣu pradakṣiṇam /

vicintayati patreṣu varṇaikaikam anukramāt // JA 35.96 // om ṇamo arahamṭāṇaṃ /

八方に花卉を備えた蓮華に立っており、大変輝いている酷暑季の太陽として自己を憶念すべし。om 字から始まるかのマントラを、東の花卉から右回りに一文字ずつ順番に念想すべし。[以上が]「オーム、阿羅漢方に礼拝 (om ṇamo arahamṭāṇaṃ)」である。

ヨーガ行者は以上の観想をしながら、om ṇamo arahamṭāṇaṃ のマントラの毎日一千百回憶念する²⁴。

adhikṛtya cchandaṃ pūrvam pūrvāśāsamukhaḥ param /

smaraty aṣṭākṣaram mantram sahasraikam śatādhikam // JA 35.97

pratyaḥam pratipatreṣu mahendrāśādy anukramāt /

23 [Ohira: 1994: 33] 及び [河崎: 2016: 19] を参照。

24 √jap (唱える)ではなく、√smṛ (憶念する)の動詞が使われており、口での念誦ではなく、心の中での念想であると考えられる。ヒンディー語訳でもマントラを「瞑想する (dhyāna karanā)」と訳されている。

aṣṭrātram japed yogī prasannāmalamānasah // JA 35.98

東の花弁の方を向いて、東の方角を向いた者は熱心に、八文字のマントラを一千百回憶念すべし。ヨーガ行者は毎日、東の方角を始めに各花弁において順番に八日間、純粹無垢な心をもって唱えるべし。

そして八日間の om ṇamo arahamṭāṇam というマントラの文字をそれぞれ一千百回ずつ念じた後に、このマントラの前頭の om 字を抜いた ṇamo arahamṭāṇam という 7 文字のマントラの念想を行う²⁵。

asyācintyaprabhāveṇa krūrāśayakalaṅkitāḥ /

tyajanti jantavo darpaṃ siṃhatrastā iva dvipāḥ // JA 35.99

aṣṭrātre vyatikrānte kamalasyāśya vartinaḥ /

nirūpayati patreṣu varṇān etān anukramāt // JA 35.100

ālambya prakriyām etām pūrvam vighnaughaśāntaye /

paścāt saptākṣaram mantraṃ dhyāyet praṇavavarjitam // JA 35.101

mantraḥ praṇavapūrvo'yaṃ niḥśīṣābhīṣtasiddhidaḥ /

aikhānekakarmārthaṃ muktyarthaṃ praṇavacyutaḥ // JA 35.102 // ṇamo arahamṭāṇam /

それ（マントラ）の不可思議な力によって、残忍な心で汚れたものたちは獅子に怯えた象のように驕りを捨て去る。八日間を経て、[ヨーガ行者は] その蓮華の花弁にあるそれらの文字について順番に想起する。障礙の集まりを静めるためにこの修法に依拠し、続いて、om 字のない 7 文字のマントラ（ṇamo arahamṭāṇam）を瞑想すべし。このマントラの om 字から始まるもの [の場合] は、世俗的な多くの事柄を目的とし、全ての望みの成就をもたらすものである。om 字のないもの [の場合] は解脱を目的とする。[以上が]「阿羅漢方に礼拝（ṇamo arahamṭāṇam）」である。

JA 35.102 によれば、om ṇamo arahamṭāṇam という八文字のマントラは世俗的な望みの成就をもたらすものであり、om 字を省いた ṇamo arahamṭāṇam という七文字のマントラは解脱のためのものであるという。

JA 35.95-101 の修行の流れとして、om ṇamo arahamṭāṇam の八日間の念誦は障礙除けを目的とし、ṇamo arahamṭāṇam の瞑想を始める前準備に充てている。拙前論で論じた JA 34 章「物質的な対象に関わる瞑想」中にも魑魅魍魎からの悪影響を防ぐ果報が説かれている²⁶。シュバチャンドラはマントラの念誦を解脱や善趣に至るための出世間的な目的ばかり

25 七文字のマントラの瞑想方法に関しては詳しい記述がない。

26 [是松：2020：71] を参照。

りではなく、世俗的な目的を叶える力も認めていたのだと考えられる²⁷。

5. 結論

JA35章「言葉に関わる瞑想」では、様々なマントラや明呪を瞑想の対象とする多くの瞑想方法が説かれている。ジャイナ教における代表的なマントラとしては「五敬礼」がある。「五敬礼」は、ジャイナ教徒にとっての帰依の対象である阿羅漢・解脱者・阿闍梨・和尚・一切の出家者という五種の最高者に礼拝する内容となっている。JAに説かれるマントラの多くもこの「五敬礼」の礼拝対象に関するものとなっている。

JAでも「五敬礼」のマントラについて説かれており、その功德は解脱であり、罪を犯した動物ですら天界に赴かせる力があるという。そして、シュバチャンドラは「五敬礼」の念誦の功德として一日断食した分の果報が得られると説く。この後の偈頌も「五敬礼」を短くした様々なマントラについて説かれ、最終的に一音節の a 字まで短縮される。長ければ長いマントラ程少ない念誦数で、短ければ短いマントラ程多い念誦数によって、一日分の断食の結果が得られるという。

JAに説かれる「五敬礼」やそれに関連する類似した幾つかのマントラは9世紀に書かれた空衣派文献 AP にも見られる。しかし、APでは念誦の回数規定はなく、その功德も JA ほどははっきりとしたものではなく、観念的な内容に留まっている。

JA35章では他にも様々な瞑想法が説かれている。例えば、「字母」の観想では、母音字と子音字を臍・喉・口の蓮華の花弁に布置して念想することによって、聖典知の精通や様々な病気の克服を説く。「マントラの王者と打ち鳴らされない音」の観想では「マントラの王者」と呼ばれる rhaṁ 字を瞑想し、そこから二つの r 字とチャンドラビンドゥを取り除いて、「打ち鳴らされない音」と呼称される ha 字を想起し、ha 字を髪の毛の先程小さくして、最終的に ha 字すらも消滅して、輝きに満ちた世界を見るというある種の神秘体験を伴った結果が説かれている。

このような神秘体験の描写が多い他の瞑想法としては hrīṁ 字の観想がある。hrīṁ 字の観想では、口の中に八弁蓮華を念じ、その各花弁に母音、喉音、口蓋音、反舌音、歯音、唇音、有声半母音、3つの歯擦音と1つの気音のサンスクリットの八字音列が乗っており、さらにその八花弁に om, ṇa, mo, a, ra, haṁ, tā, ṇam という八文字を右回りの順に布置する。

27 このような記述は JA 35 章の aum 字の観想法の中にも見られる。この観想法の説明でシュバチャンドラは aum 字の色とタントラの六種法 (ṣaṭkarman) を結びつけている。

sāndrasindūvarañābhāṁ yadi vā vidrumaprabham /
cintyamānaṁ jagatsarvaṁ kṣobhayaty api saṁgatam // JA 35.38

jāmbūnadanibhaṁ stambhe vidveṣe kajjalatvipam /
dhyeyaṁ vaśyādike raktaṁ candrābhaṁ karmaśātane // JA 35.39 // aum /

艶やかな朱色に輝き、あるいは珊瑚色に輝くものとして想起されたもの (aum 字) は世界の皆全てを友好的に揺れ動かす。停止の場合は黄金色に、離間の場合は黒色に、敬愛 (vaśya) などの場合は赤色に、業の消滅の場合は月のように白く [aum 字が] 瞑想されるべきである。[以上が] aum である。

そして口の蓮華の中央の花托の上に hrīm 字を観想する。この観想を6か月間続ければ口から煙の柱、1年以上継続すれば口から大きな火、そして一切知者の口や一切知者そのものを目の前にいるかのように見て、最終的に解脱に至る。このように、シュバチャンドラが hrīm 字の観想による結果として、一切知者の口や一切知者を現前にいるかのように見る、と説くのは彼の時点で解脱のために必要なジャイナ教聖典の伝承が途絶えていることと関わり、タントリズムにおける観想によって最終的な結果を先取りする考え方を踏襲していた可能性は十分に考えられる。

hrīm 字の観想のように、瞑想の継続期間が説かれた行法は JA 35.95-102 にも見られる。ここでシュバチャンドラは、om ṇamo arahamṭāṇam という八字のマントラは世俗的な成就をもたらすものとし、om 字を省いた ṇamo arahamṭāṇam という七文字のマントラは解脱を目的とするものとして区別している。そして修行の流れとしては、om ṇamo arahamṭāṇam を八日間、障礙除けのために八方位に向かって一千百回ずつ念想し、ṇamo arahamṭāṇam の瞑想を始めるための前準備に充てられている。シュバチャンドラはマントラを使った瞑想が解脱や善趣に赴くための出世間的な目的ばかりではなく、世俗的な目的を叶える力も備えていることを認めている。

参考文献

一次資料

Ādipurāṇa of Jinasena

edited and translated by Pannālāl Jain, 2004 (vol.1) and 2011 (vol. 2) , Bhāratīya Jñānapīṭha: NayīDillī.

Jñānārṇava of Śubhacandra

edited and translated by Bālacandra Siddhānta Śāstrī, 1977, Jīvarāja Jaina Granthamālā, Hindī Vibhāga 30, Jaina Saṃskṛti Saṃrakṣaka Sangha: Solāpūra.

Tattvārthāsūtra of Umāsvāmin

in the Sarvārthasiddhi, edited and translated by Phūlacandra Śāstrī, Fourth Edition 1989, Bhāratīya Jñānapīṭha: Nāī Dillī.

二次資料

Ohira, Suzuko

[1982] *A Study of Tattvārthasūtra with Bhāṣya: With Special Reference to Authorship and Date*, L. D. Institute of Indology: Ahmedabad.

Padmanabh, S. Jaini

[1974] *The Jaina Path of Purification*, 4th Reprint in 2014, Motilal Banarasidass: Delhi.

Qvarnström, Olle

[2012] *A Handbook on the Three Jewels of Jainism: the Yogaśāstra of Hemacandra*, Hindī Grantha Kāryālaya Pabliśara: Mumbāī.

Uditaprabhā, Sādhvī Uṣā

[2007] *Jaina Dharma meṃ Dhyāna kā Aitihāsika Vikāsa Krama*, Navabhārata Prakāśana: Jodhapura.

Wiley, Kristi L.

[2014] *The A-to-Z of Jainism*, First Edition 2006, Scarecrow Press, Inc: U.S.A) , Vision Books Pvt. Ltd: New Delhi.

河崎豊

[2016] 「飢えと屍肉：何のための食事か」(『印度民族研究 15号』印度民族研究会。

金倉圓照

[1944] 『印度精神文化の研究——特にジャイナを中心として』培風館。

是松宏明

[2020] 「ジャイナ教空衣派シュバチャンドラ著『ジュニャーナールナヴァ』所説の「タントラ的な美徳の瞑想」〈1〉——『物質的な対象に関わる瞑想 (piṇḍasthadhyāna)』について——」(『東洋学研究 57号』東洋学研究所)

鈴木重信

[1930] 『耆那教聖典』世界聖典全集刊行會(改造社版)。

引田弘道

[1997] 『ヒンドゥータントリズムの研究』山喜房佛書林。

キーワード

ジャイナ教、タントリズム、瞑想、『ジュニャーナールナヴァ』、マントラ